

なぜ「すわこ文化村」なのか・・・つながりと平和

2010年4月5日 すわこ文化村代表理事 毛利正道

1 NHKテレビ「無縁社会」などから

- ・人間扱いされない、使い捨てられる社会
- ・独りでいると寂しくて涙が出る
- ・家族に迷惑かけたくない
- ・笑顔のない社会
- ・つながりがないと、存在しないと同じ
- ・一日中誰とも口をきかない
- ・お店に入っても多くの人がひと言もしゃべらない
- ・遺書「この世にもう生きていけなくてごめんなさい」
- ・助けてと言えない「非社会」
- ・自立を求めて、孤立を与えられる
- ・故郷でも都会でもつながりがなく、無縁死
- ・せめて天国では、独りになりたくない
- ・無縁ビジネスが根を太く張っている社会
- ・背景にある自己責任論、そこには未来はない・・・

今年に入って、近くの福祉施設に行つて、「男はつらいよ」リリー（浅丘ルリ子）シリーズ3作を順次上映したが、私自身いずれもほぼ終始涙が湧き出た。映画好きの私の眼でみて、最高の感動作に入る。公開された35年前頃にもむろん観ているが、間違いなくこんなには感動しなかった。なぜか、3作目で分かった。登場する人みんなが、本気で人のことを心配している。現代はそれがない寂しい社会だからこそ、そしてそれが人間社会に不可欠のものだからこそ、こんなにも感動したのだと。

現代日本は、子どもから若者・30代・家族・働き盛り・高齢者、学校・地域・職場、男女、あらゆる階層にわたり、ひとと人がバラバラにさせられ、人間にとってかけがえのないつながり・絆が失われている。その孤立度は、世界の中でも群を抜いている。

2 「すわこ文化村」発足から一年余

2009年4月1日、感動溢れる文化企画を主催し、感動で開いたところで温かいつながりを築く、をテーマに、地域でNPO非営利活動任意団体「すわこ文化村」を立ち上げた。私と地域に住む3名の女性が理事となり（私が代表理事）、資金面の不安なく望む企画を実現するため、出資金（終身会費）1万円の負担を条件に募ったところ、これまでに43名から会員になっていただけた。

【これまでに実施した企画】（各企画の2段目は、地元紙の見出し・記事）

- 09年6月荒木栄を歌ううたごえ喫茶と「荒木栄の歌が聞こえる」上映会 50名
「すわこ文化村」が発足 荒木栄を取り上げた初企画好評
- 同年8月「Cocco終わらない旅 大丈夫であるように」上映会 80名
若い世代中心に90名が参加 アンケートに若い世代の声びっしり
- 同年9月(飛び入り企画)「冬の兵士・良心の告発」を観て語り合う会 28名
現代の戦争は殺される側にも殺す側にも耐えられないものになっている
- 同年11月 松元ヒロ公演「繋がる夢 つながるライブ」 102名
熱いメッセージに笑い拍手 軽妙な語りで風刺
- 同年12月(飛び入り企画)絵本画家永吉カヨさん すてきな原画&トーク 18名
永吉カヨさんとほのぼの 絵本の魅力を語る
- 10年2月「1000年の山古志」上映会 141名
「1000年の山古志」に感動 復興描く映画に多くの来場
- 同年3月(飛び入り企画)DVD「どうする? あんぼ」上映交流会 18名
基地は有事の際に標的になる 本当に基地が必要なのか考えて
- 【今後予定している企画】
- 同年6月「いのちの山河 日本の青空」上映会 諏訪共立病院と共に呼びかけて
- 同年8月 劇団シューティングスター公演「父と暮らせば」
- 同年8月 会員交流合宿 貸し切りペンションにて
- 同年11月 文化祭 (会員を始め多くの人びとから一芸を披露していただく)

毎月の理事会が楽しく、そこで決めて10着特注で揃えた緑色のすてきな法被を着て、毎回記者会見。趣旨に共鳴していただいているのでしょ、地元の複数の新聞が、企画発表時と実施時にはほぼ必ず、ときには中間の実行委員会の様子などについても、丁寧に、大きく、ときには一面トップで報道。裁判所調停委員をしている席上、当事者から「新聞に出ていましたね」とにこやかに声をかけられ、その「威力」を実感した。おかげで、どの企画も、ほぼ半数が初めてお顔を見る方であり、「まず、お隣と行き来してみませんか」との私の声に大きく頷いたり、晴れ晴れと、満足そうなお顔で会場を去る方が多い。収支も安定。今年3月のDVD上映交流会で、このDVDを用いてあちこちで上映交流会を開いてはと提起したところ、半数の9名がその意向を示し、少なくともこれまで(4月5日)に4カ所での上映が決まった。

特筆すべきは、「諏訪にいがた県人会」の発足であろう。私が新潟出身であるところから、この際に遠く郷里を離れて当地で暮らしている人びとの集まりを造れないかと、新潟の映画「1000年の山古志」企画発表時に、「新潟県人集まれ」と大きく報道していただき、それがご縁となって、映画を観に来られた7名が世話人となってこの4月中に大きな集まりを持つことになった。準備会の席上、「寂しい」「絆」「つながり」という言葉が飛び交ったのが印象的だった。「いのちの山河」でも、民医連医療機関に呼びかけ、若者と共に学習会で深めるなど、熱いつながりになっている。このように、いろいろな機会に、いろいろなつながりを作ったり強めたりしたいと思っている。

3 なぜ、つながりを築くのか

ヨーロッパでは、封建社会から資本主義社会への移行に15世紀頃から数百年費やしており、その間に闘いを重ねつつ人間一人ひとりが個人として尊重されるようになり、その確立した個人がまた縦横に連帯して闘い歴史を進めてきた。これに対し、日本では、その期間が明治初年から数えても100年、封建社会の重要な要素である「主に従」地縁血縁社会からの離脱という面では、主要には戦後からわずか65年にすぎない。しかも、新自由主義=自己責任論に席卷されているここ30年である。このようなあまりにも急激=ハイスピードな資本主義的(競争主義的)深化に、歩く速さがぴったりしている人間は到底ついていけない。これによるつながりの喪失は、多くは貧困=経済弱者にスパイラル式に(悪循環になって)表れるものの、経済弱者とは言いにくい層にもかなり普遍的に生ずるまでになっている。

私は、このような壊れつつある日本人を、私の出来るところから救いたい。そう思って「すわこ文化村」の活動を進めるなかで、自宅の隣家を27年前の新築時にちょっと訪ねただけであることにハッと、この正月に思い切って訪ねた。ご夫婦お二人とお酒をいただきながらなんと3時間半も話に花が咲き、この上なく楽しかった。後で聞くに、隣家でも何十年ぶりの楽しさだった、またぜひに、とのこと。「諏訪にいがた県人会」も、遠く故郷を離れて42年になる私を救うことであろう。これに限らず、多種多様な新たな出会いがあり、私自身、すわこ文化村の活動が本当に楽しい。昨年8月に還暦を迎えた私にふさわしい新たな挑戦である。私を含めた日本人を救うには、日本全国至るところで、ひとと人のつながりを築き太くする、いろいろなしかし、意識的な取組がなされる必要がある。それが、真に自立した個人を育む道でもある。一人ひとりの住民にとって、その人が自室から外に出かけるいくつもの機会がある、という社会を築きたい。すわこ文化村は、あくまで私のおかれた条件を最大に生かした一例に過ぎない。全国各地で、志を同じくする人びとが立ち上がることを期待する。そして、そう遠くない将来、「全国文化村経験交流会」が開催できれば、本望である。

4 戦争を止める最大の力

このように、つながりを喪失しているということは、人間のみならず社会が崩壊しつつあるということである。現代の日本人が人権や平和のための闘いに立ち上がらないとして嘆く声がある。それは、自公政権を引きずり下ろした日本人に失礼であるが、しかし、立ち上がるまでにあまりに腰が重いと実感することも少なくない。よく湯浅誠が言うように、闘いに立ち上がるには、闘わなくてもよい「居場所=つながり」が必要なのではないか。そうだとすると、こと平和・人権を謳う団体は、当面の闘いの課題に対応するだけでなく、それとともに、その団体の特質にふさわしいひとと人のつながり=居場所を築くこと、それ自体を重要な課題にすべきである。

加えて、コスタリカに行ったときに、あちこちで似た話を聞いた。それは、子どもに遊びと愛と自己実現の場を与えれば、自己肯定感をもった子に育つ。そうすれば、他人に

対して思いやりのある子どもに育ち、そのような大人が多数になれば、他国のひとに思いやりを持てる国民になる、そうすればコスタリカが戦争をすることは決してないと。

内山節も、諏訪で長く教壇に立った三澤勝衛の「風土論」を紐解きながら、自分が暮らすかけがえのない風土をよく知れば、世界の様々な地域に、自分たちと同じようにそれぞれの風土と共に生きる人びとがいることに気付く、そうすれば、そこに生きる人びとをかけがえのない風土と共に戦争で破壊しようとは思わない、ここに見事な平和思想があると述べる（「清浄なる精神」）。

このように見てくると、人間が他者との温かいつながりを持っていれば、他国に住む人びとも自分たちと同じ温かいつながりを持った存在だと容易に想像することができ、間違っても「核兵器をぶち込め」というような発想にならないのではないかと。

翻ってみるに、国民が孤立分断されている社会では、マスメディアを介した権力側のプロパガンダが、国民一人ひとりの心を捕らえてなかなか離さない。2004年4月のイラクの人々を助けに入った高遠菜穂子さんら邦人3名イラク人質事件。その時、「自衛隊を撤退させないと焼き殺す」との犯行声明の直後から、3名が殺害されたときの政府の責任を免れんとするか、小池百合子環境相始め政府関係者が次々に「自作自演」「自業自得」「自己責任」「迷惑」と合唱し、メディアがこれを縦横に増幅させた。そのため、羽田空港を降りた3名は「犯罪者のように扱われて」（韓国紙）手をぶるぶる振るわせるところに追い込まれ、更に「死ね」「迷惑」などとおどろおどろしく書かれた大量の封書などがその後4年間も自宅に送りつけられた。そこには自己責任論で日々苦悩している日本人が政府の妄言に「共振」したという面があるにしても、そのすさまじさは、このあまりの騒動を見て、アメリカのパウエル国務長官が「危険地域に誰も入らなくなったら世界は前進しない。3名を誇りに思うべき」と忠告したほどであった。これと似た事態が、09年4月の北朝鮮「ミサイル」発射問題でも起きた。北朝鮮もアメリカも、事前に人工衛星と公表しているにも拘わらず、日本は政府・メディア挙げて「ミサイル発射」を迎え撃つとして、戦争一歩手前の大キャンペーンを繰り広げた。このようなとき、民衆がつながりあう日本社会であったとしたなら、「政府はああ言っているが、ホントかな」との疑問が急速に広がり得たのではないだろうか。

このように、つながりあう日本社会なら、メディアを使った戦争やファシズムに向かう権力側のプロパガンダを容易には許さないであろう。そしてまた、抑止力論の対象にされている北朝鮮や中国から見たとき、日本がこのような安心できる国であることが分かれば、国際的非難を浴びてまで武力で事を構えようとはしないであろう。全国8千に迫る多彩な人士による9条の会が結成されているのも、それをさらにすべての小学校区に結成しようと呼びかけられているのも、このような視点と無縁ではあるまい。